千葉県文化財センター調査報告第308集

千葉市武石遺跡

―千葉西税務署埋蔵文化財調査報告書―

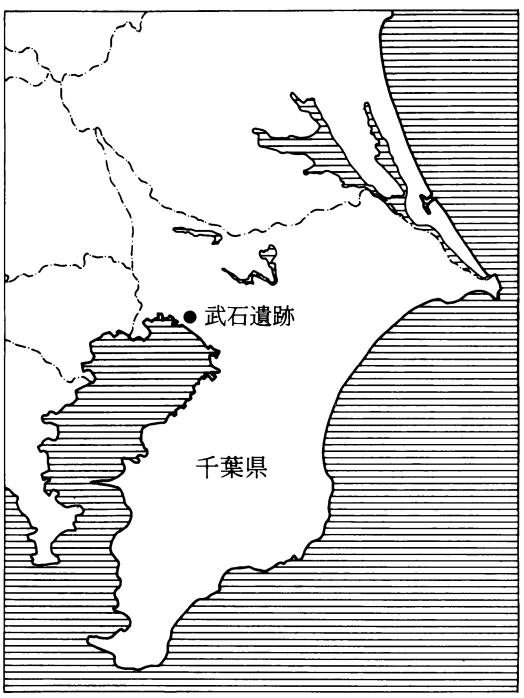
平成9年3月

東京国税局

財団法人　千葉県文化財センター

千葉市武石遺跡

―千葉西税務署埋蔵文化財調査報告書―



(財)千葉県文化財センター

南部調査事務所

序　文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第308集として、東京国税局の千葉西税務署増設事業に伴って実施した千葉市武石遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、旧石器時代の石器や弥生時代の溝が検出されるなど、この地域の旧石器時代以降の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。この報告書が、学術資料として、また普及啓発の資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成9年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長　中村　好成

凡　例

1　本書は、東京国税局による千葉西税務署増設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　本書に収録した遺跡は、千葉県千葉市花見川区武石町1丁目520番地2号に所在する武石遺跡（遺跡コード201-084）である。

3　発掘調査から報告書作成に至る業務は、東京国税局の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

4　発掘作業及び整理作業は、調査部長　堀部昭夫（昭和63年度）・調査研究部長　西山太郎（平成8年度）・班長　西山太郎（昭和63年度）・中央調査事務所長　藤崎芳樹（平成8年度）の指導のもと、下記の職員が実施した。

　　発掘調査　昭和63年10月1日～昭和63年11月8日　主任調査研究員　雨宮龍太郎

　　整理作業　平成8年10月1日～平成8年12月27日　技師　岩谷久美子

5　本書の執筆は、技師　岩谷久美子が行った。

6　発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、東京国税局、千葉西税務署、千葉市教育委員会、宇井義典氏の御指導、御協力を得た。

7　本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

　　第2図　国土地理院発行　1／25,000地形図「習志野」（N1-54-19-14-4）

　　「千葉西部」（N1-54-19-15-3）

　　第3図　参謀本部陸軍部測量局作成　1／20,000迅速図「登戸村」

　　第4図　千葉市役所発行　1／2,500千葉市都市図（D-3-ハ）

　　（昭和51年調査分は、周辺地形等から合成した。また、平成3年度調査成果（未報告）を併せて掲載した。）

8　周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。

9　本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。

10　挿図及び表に使用した記号の用例は、次のとおりである。

●：剥片　○：使用剥片（UF）　△：砕片　□：石核

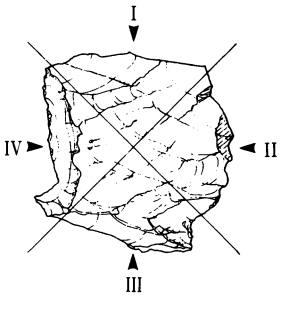
打面形状　0：自然面　1：節理面　2：平坦打面　3：複剥離面打面

4：細部調整打面　5：線状打面　－：不明

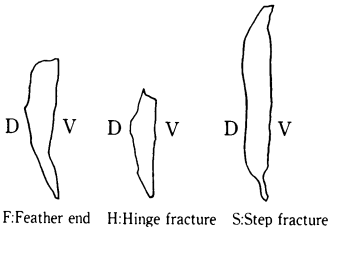
折面部位　H：打面側　B：末端側　R：右側縁部　L：左側縁部

背面構成

C：自然面
S：節理面
－：不明



末端形状



本文目次

Ⅰ　はじめに……1
　1　調査の概要……1
　　（1）調査の経緯と経過……1
　　（2）調査の方法……1
　2　遺跡の位置と環境……3
Ⅱ　検出した遺構と遺物……7
　1　旧石器時代……7
　　（1）概要……7
　　（2）出土遺物……17
　2　弥生時代以降……20
　　（1）概要……20
　　（2）遺構と出土遺物……20
Ⅲ　まとめ……22
　1　旧石器時代……22
　2　弥生時代以降……22
報告書抄録……巻末

挿図目次

第1図　グリッド配置図……1
第2図　武石遺跡と周辺の遺跡……2
第3図　武石遺跡周辺地形図……4
第4図　遺構配置図……5
第5図　下層調査区と石器集中地点……6
第6図　基本層序……7
第7図　石器出土分布図……8
第8図　出土石器実測図（1）……9
第9図　出土石器実測図（2）……10
第10図　出土石器実測図（3）……11
第11図　出土石器実測図（4）……12
第12図　出土石器実測図（5）……13
第13図　出土石器実測図（6）……14
第14図　出土石器実測図（7）……15
第15図　出土石器実測図（8）……16
第16図　出土石器実測図（9）……17
第17図　001・002号跡及び出土遺物……21

表 目 次

第1表　石器属性表（1）……18
第2表　石器属性表（2）……19

図版目次

図版1　遺跡周辺航空写真
図版2　旧石器時代石器出土状況、001号跡
図版3　旧石器時代出土石器
図版4　旧石器時代出土石器

Ⅰ　はじめに

1　調査の概要

(1)　調査の経緯と経過

昭和63年、東京国税局は千葉西税務署の増築を計画し、事業地区に所在する埋蔵文化財の取扱いについて千葉県教育委員会と協議した結果、記録保存の措置を講ずることとなり、財団法人千葉県文化財センターが東京国税局の委託を受け発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、昭和63年10月１日から昭和63年11月８日まで実施した。本調査区の隣接地は、昭和51年に千葉西税務署[1)]の建設に伴い発掘調査され、各時代にわたる遺構と遺物の所在が認められている。そのため、上層については対象面積600.75㎡全域を本調査範囲として実施した。下層の確認調査は、600.75㎡の４％に当たる24㎡を対象に実施した。その結果、確認グリッドの１か所から石器が確認されたため、40㎡を下層本調査範囲として実施した。

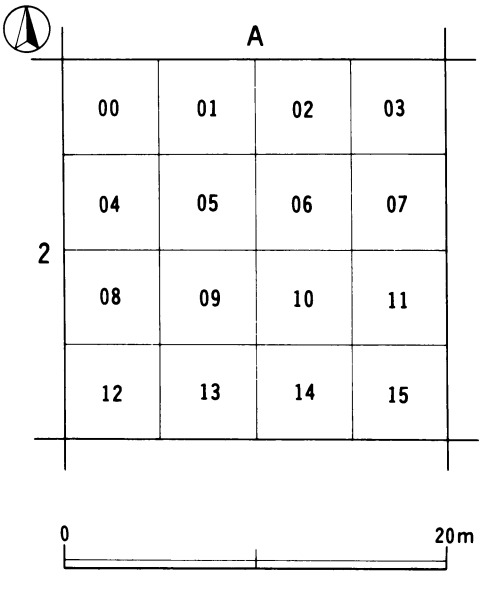
調査の結果、旧石器時代の石器集中地点１か所、弥生時代中期後半の溝１条、それ以降の溝１条が検出された。出土した遺物は、旧石器時代の石器112点、縄文土器、弥生土器、土師器等である。

(2)　調査の方法

調査区は、公共座標を基準とし、調査対象範囲を20m×20mの方眼の大グリッドで東西２区画、南北３区画設定し、西から東にA・B・C、北から南に１・２・３として、これらを組み合わせて１A、２Bと呼称した。さらに、大グリッド内を５m方眼の小グリッドに16分割し、北西隅を起点に東へ00・01・02・03まで、次の段の西端から東へ04・05‥として南東隅を15とした。各々の小グリッドは、大グリッドと小グリッドを組み合わせて、2A00、2B00…と呼称した（第１図）。

検出された上層の遺構に対しては、遺構番号を001号、002号と付し、土層観察用のベルトを設定して土層観察を行いながら掘り下げた。遺構に伴って出土した遺物は、遺構内の通し番号で処理し、小破片は一括して取り上げた。

下層の確認調査は、２m×２mグリッドを設定して行った。本調査は、遺物が検出された地点の周囲を拡張し、土層観察用のベルトを設定して実施した。遺物については、出土地点を記録しながらグリッド内の通し番号で取り上げた。



第１図　グリッド配置図

第2図　武石遺跡と周辺の遺跡（S＝1/25,000）

2　遺跡の位置と環境

本遺跡は千葉市の北東部、千葉県北部に広がる下総台地の南西部に位置している。標高20m前後の台地上はほぼ平坦で、低地までの比高差は約10mを測る。南東には花見川、北西には浜田川が流れ、それぞれ西方約4kmの東京湾に流入する。花見川が東京湾に注ぐ周辺地域は、浸食谷が入り込み多くの舌状台地を形成し、樹枝状に発達した支谷が台地の奥まで複雑に入り込んでいる。本遺跡は、花見川と浜田川及びその支流によって開析された両支谷にはさまれた南方に張り出す舌状台地南端部に立地している。

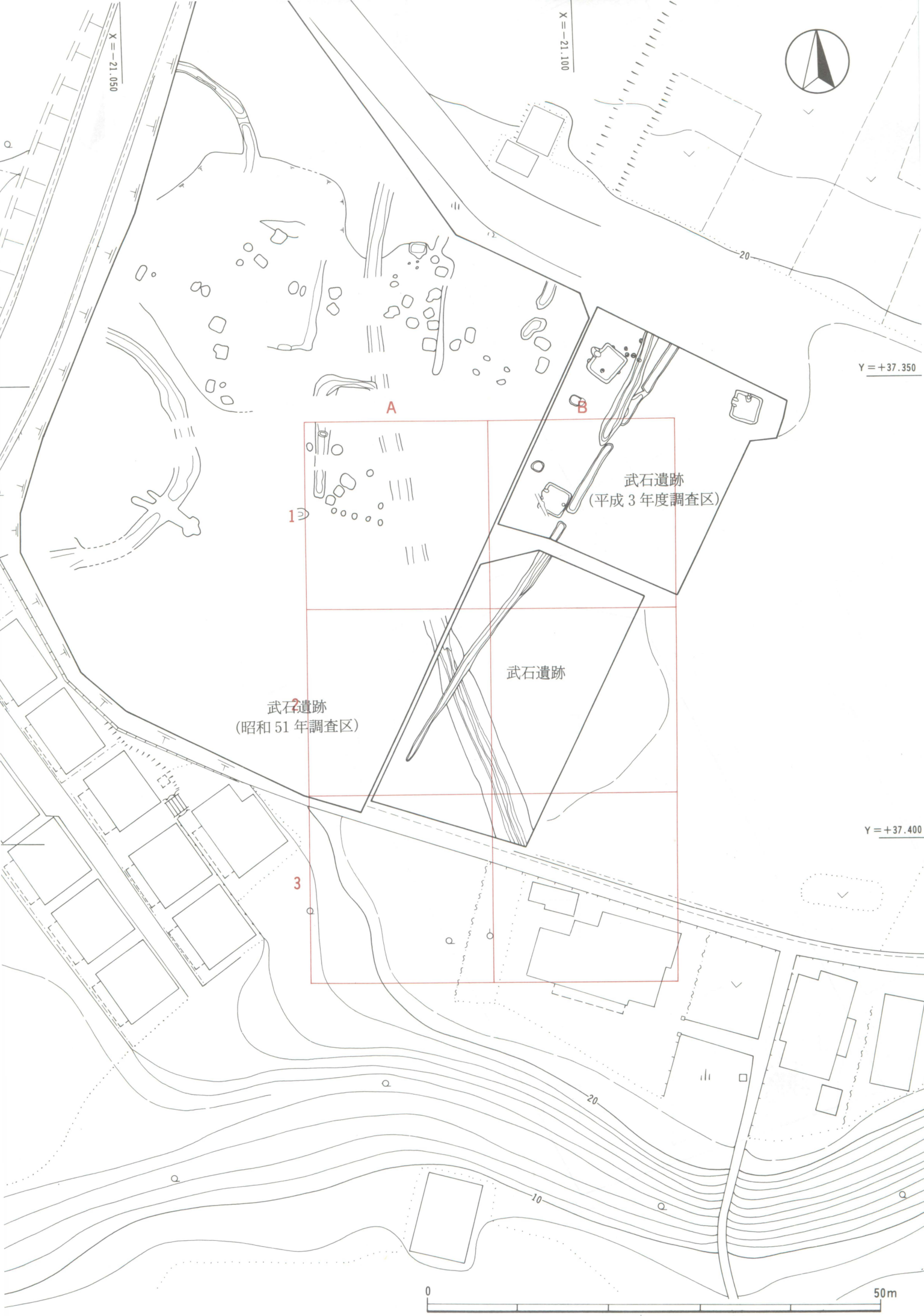
周辺の台地上には、縄文時代の集落や貝塚を伴う遺跡が数多く存在している。早期に台地の斜面に形成された城山貝塚では、貝層中から敲石や軽石製品及び茅山式土器が確認され[2]、前期に形成された花咲貝塚では、比較的遺存状態の良好な純貝層がレンズ状に堆積しているのが観察されている[3]。中期から後期の馬蹄形を呈する藤崎堀込貝塚では、貝層中から小魚骨が多量に採取されている[4]。築地貝塚でも貝が馬蹄形状に散布し、堀之内期の良好な資料が多数検出されている[5]。上記以外で調査された縄文時代の遺跡には、上ノ台遺跡[6]、大道遺跡[7]、エゴダ遺跡[8]などが挙げられる。いずれも小規模で、そのほとんどで条痕文土器を主体とする早期の遺物が検出されている。

本遺跡周辺での旧石器時代の調査例は少なく、Ⅳ層～Ⅴ層から黒曜石を主な使用石材とする石器が出土した藤崎堀込貝塚が知られている程度である。弥生時代の遺跡も報告例が少なく、馬加城遺跡[9]と上ノ台遺跡で、中期から後期の竪穴住居跡が数軒検出されている程度である。

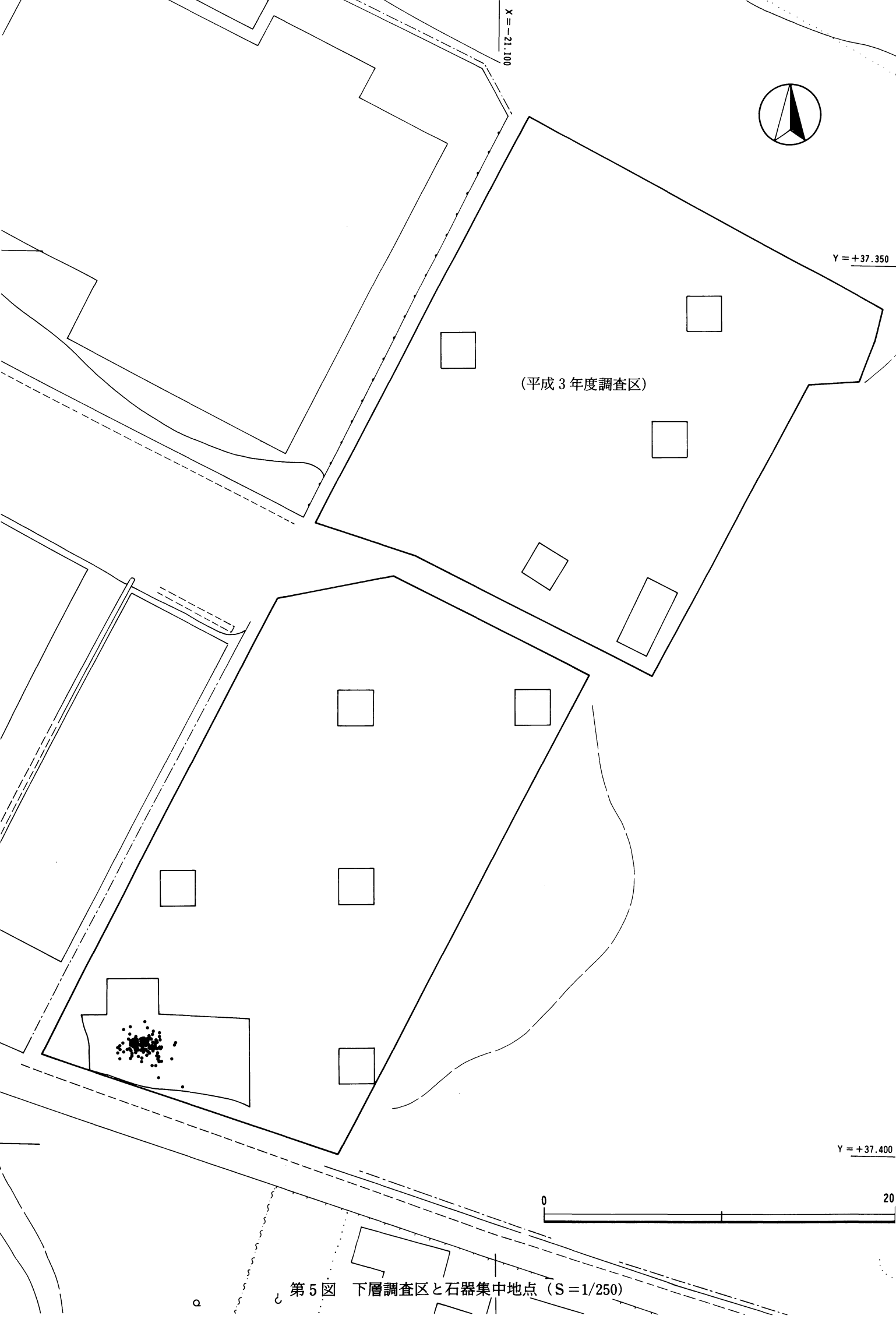
古墳時代に入ると遺跡数が増え、上ノ台遺跡で大規模な集落の形成が見られる。中期から後期を中心にした竪穴住居跡が多数検出されたほか、滑石製模造品を製作したと考えられる工房跡も確認されている。また、小規模ながらも居寒台遺跡[10]、宮脇遺跡[11]、外原遺跡[12]などで集落が展開されている。台地縁辺部には大小塚古墳群、椎崎古墳、武石古墳、子安古墳群、殿山古墳、愛宕山古墳などの円墳群が点在している。奈良・平安時代には、上述した上ノ台遺跡、宮脇遺跡、居寒台遺跡で継続して集落が営まれている。

注1　森重　彰文　1977　『武石遺跡・武石館調査報告』　日本文化財研究所
2　滝口　宏　1961　「城山・築地貝塚」『印旛手賀　印旛手賀沼周辺地域埋蔵文化財調査』　千葉県教育委員会
3　習志野市教育委員会　1971　「習志野市花咲貝塚調査報告」『習志野市文化財調査報告書Ⅳ』
4　金子　浩昌ほか　1977　『習志野市藤崎堀込貝塚－貝塚周辺の遺構及び遺物の限界調査－』　習志野市教育委員会
5　2に同じ
6　品川　裕昭ほか　1981　『千葉・上ノ台遺跡』　千葉市教育委員会
7　森　地生ほか　1981　「大道遺跡」『千葉市文化財調査報告書第4集』　千葉市教育委員会
8　伊庭　彰一ほか　1985　『千葉市エゴダ遺跡北地区調査報告』　千葉市遺跡調査会
9　村山　好文ほか　1980　『馬加城遺跡発掘調査報告書』　馬加城遺跡調査会
10　山下　亮介　1992　「居寒台遺跡」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書』　千葉市教育委員会
11　玉口　時雄ほか　1973　『宮脇－千葉市畑町宮脇遺跡発掘調査報告－』　宮脇遺跡調査団
12　八幡　一郎ほか　1972　『外原－古墳時代集落址・滑石工房址の発掘調査』　船橋市教育委員会

第３図　武石遺跡周辺地形図（Ｓ＝1/20,000）



第４図　遺構配置図（S＝1/500）



第５図　下層調査区と石器集中地点（S＝1/250）

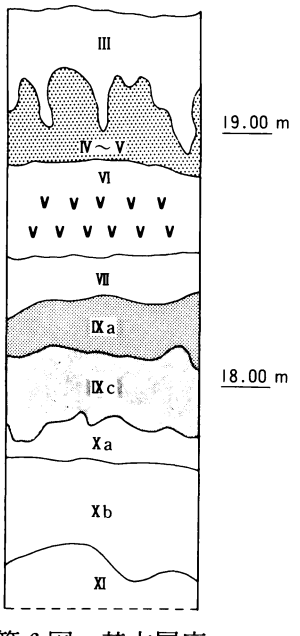
II　検出した遺構と遺物

1　旧石器時代

(1)　概要

石器集中地点１か所を検出した。この地点は、調査区の南西端の舌状台地の先端部に位置している。調査区の南西に位置する小グリット2A13の南東隅を中心に石器が集中して分布している。検出された石器総数は112点で、すべて同一母岩から剝離された剝片や砕片である。微細剝離痕が認められる剝片が数点検出された。接合資料は８例得られ、内訳は剝片どうしの接合資料が５例、剝片折断ないし欠損の接合資料が３例である。使用石材は、節理が多く認められる黒色の珪質頁岩である。石器の集中は、IXａ層からIXｃ層上部を主体にVII層下部からＸａ層上部にかけて確認されているが、IXａ層中位の石器群であろう。平面の分布は南北、東西約3.6m四方の範囲に広がり、垂直の分布は標高17.82m～18.31mの範囲に広がっている。なお、武石遺跡の隣接地の調査では、旧石器時代の遺物は検出されていない。

層序区分は以下に示すとおりである。



第６図　基本層序

III　　層　明黄褐色土層　ソフトローム層である。層厚は30cm～55cmで波状にIV・Ｖ層まで及んでいる。

IV・Ｖ層　黄褐色土層　IV層以下はハードローム層である。色調はやや暗く、黒色スコリアを含む。第１黒色帯は確認されなかった。層厚は35cm前後である。

VI　　層　明黄褐色土層　ＡＴ（姶良丹沢火山灰）を多量に含む。焼土粒、炭化粒を多量に含む。層厚は30cm～40cmである。

VII　　層　暗黄褐色土層　第２黒色帯上部に相当する層である。VI層よりやや暗色で、白色スコリア、焼土粒及び炭化粒を含む。層厚は15cm～25cmである。この層とIXａ層との境界付近から石器の垂直分布が見られ始めた。

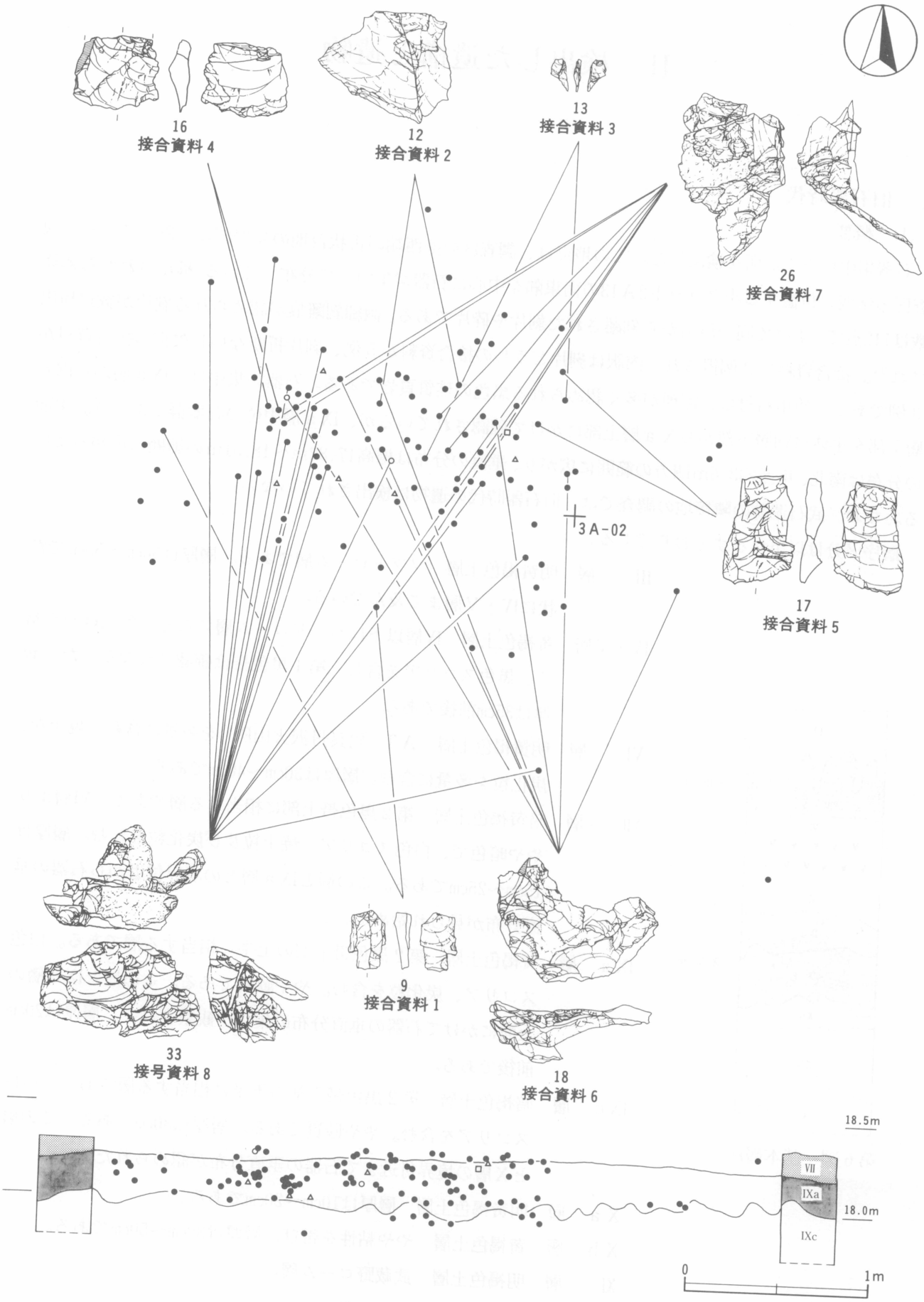
IXａ　層　黄褐色土層　第２黒色帯下部の上半に相当する層である。白色スコリア、炭化粒を含む。やや軟質である。この層とIXｃ層の上面にかけて石器の垂直分布の集中が観察された。層厚は20cm前後である。

IXｃ　層　暗褐色土層　第２黒色帯下部の下半に相当する層である。白色スコリアを含む。やや砂質である。層厚は30cmである。この層とＸ層の境界付近まで石器の垂直分布が認められた。

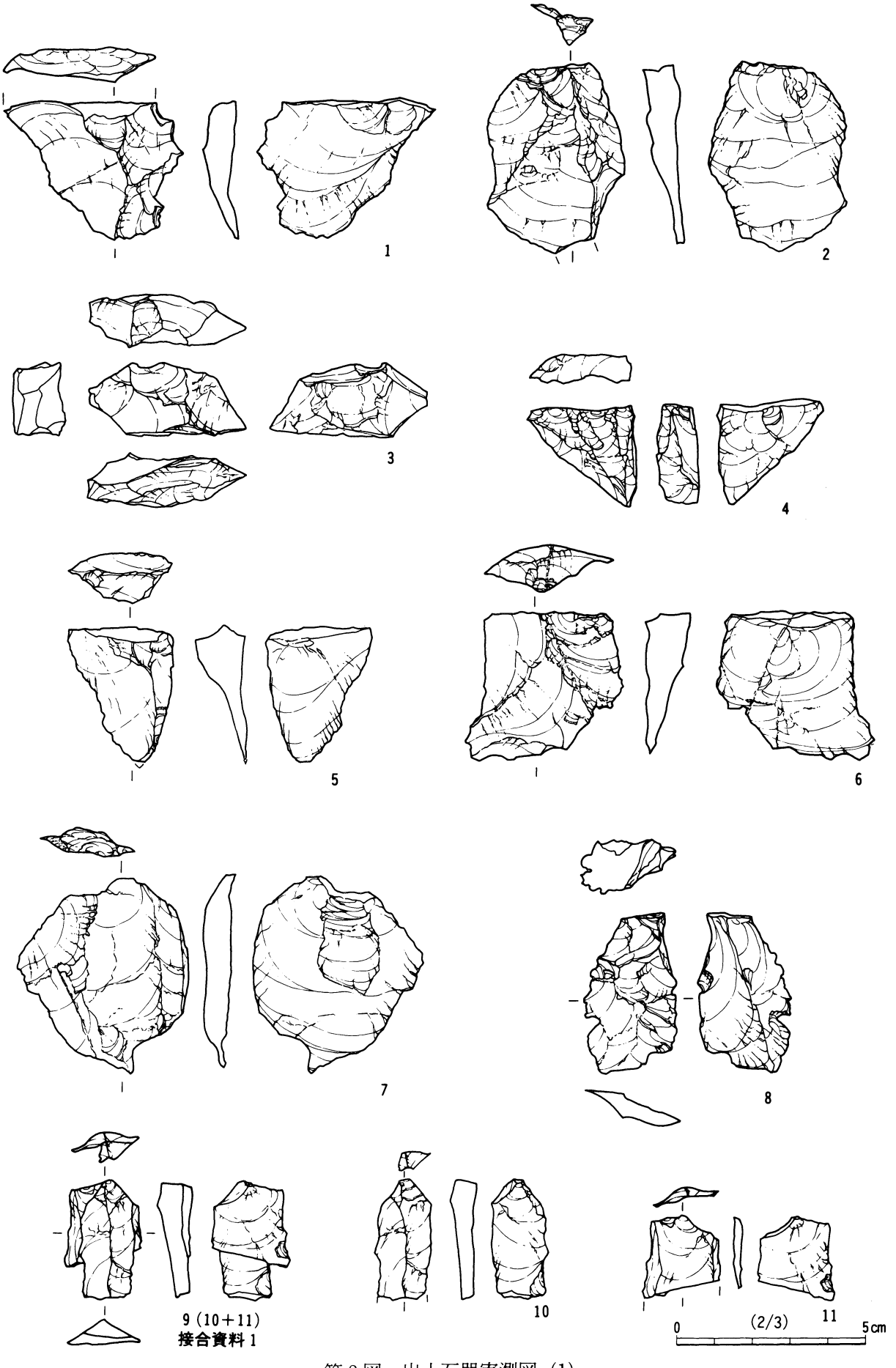
Ｘａ　層　明黄褐色土層　層厚は10cm～20cmである。

Ｘｂ　層　黄褐色土層　やや粘性を帯び、層厚は30cm～50cmである。

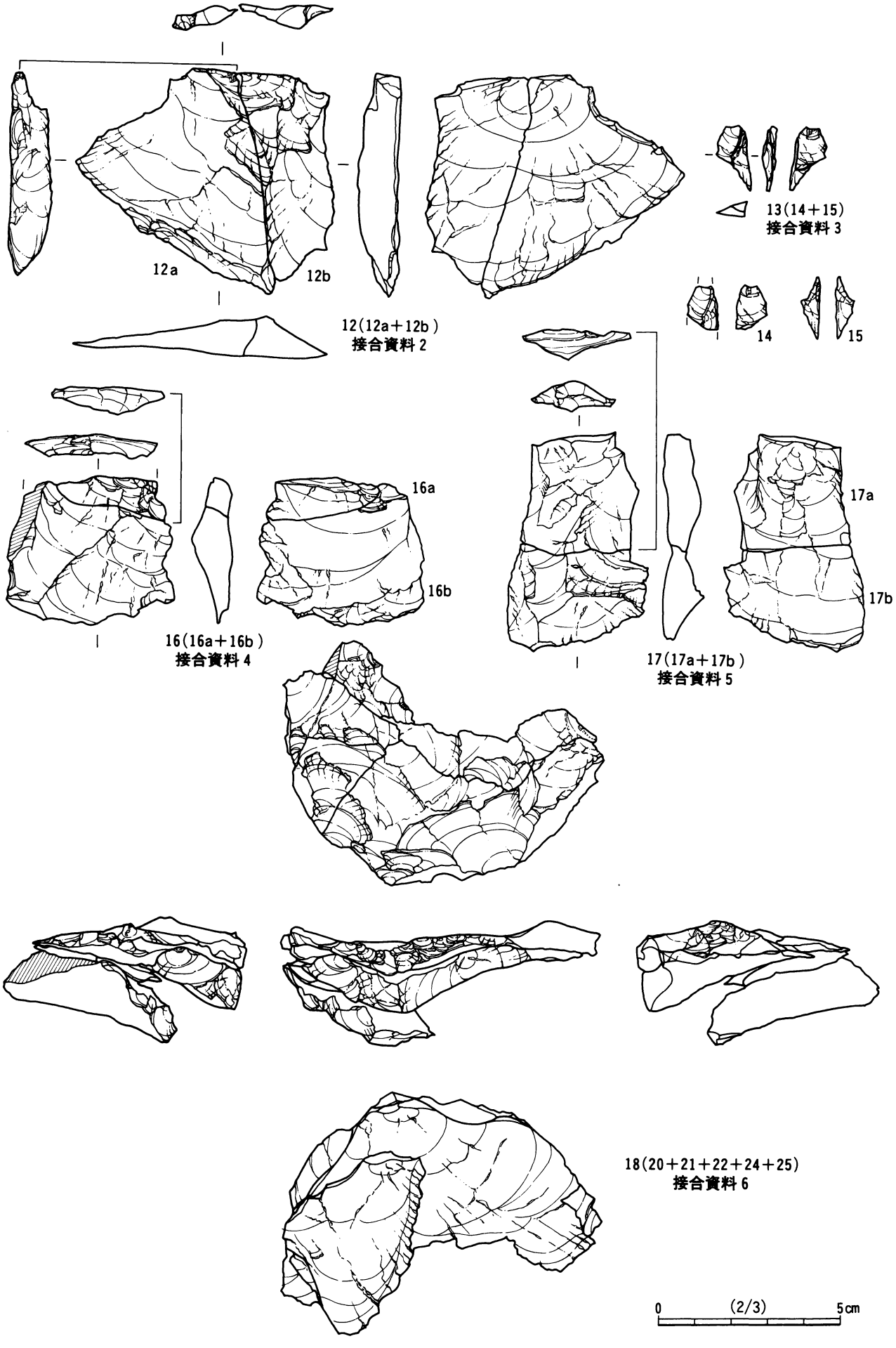
XI　　層　明褐色土層　武蔵野ローム層。


16
接合資料 4
12
接合資料 2
13
接合資料 3
26
接合資料 7
3A-02
17
接合資料 5
9
接合資料 1
33
接号資料 8
18
接合資料 6
18.5m
VII
IXa
18.0m
IXc
0
1m

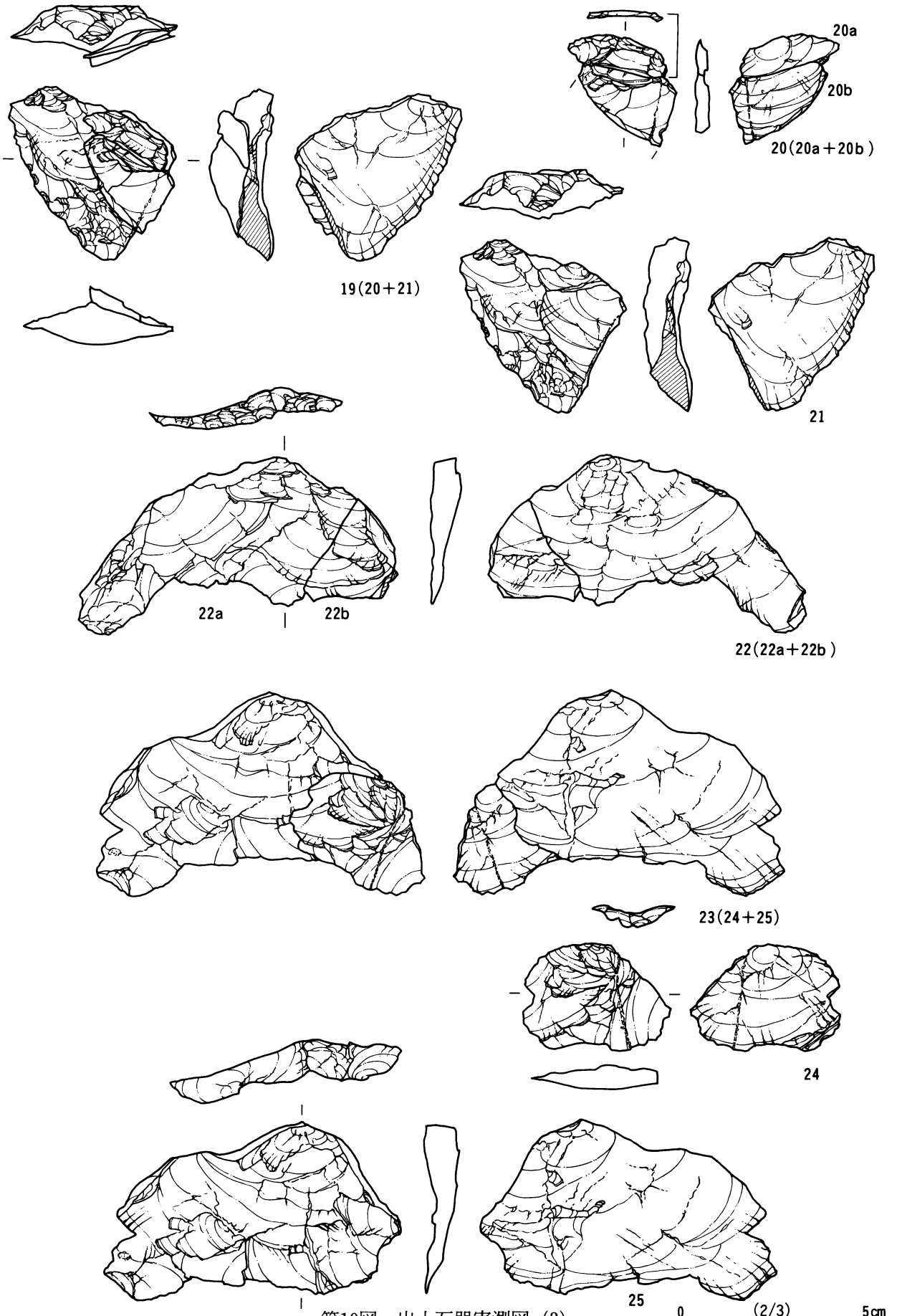
第 7 図　石器出土分布図



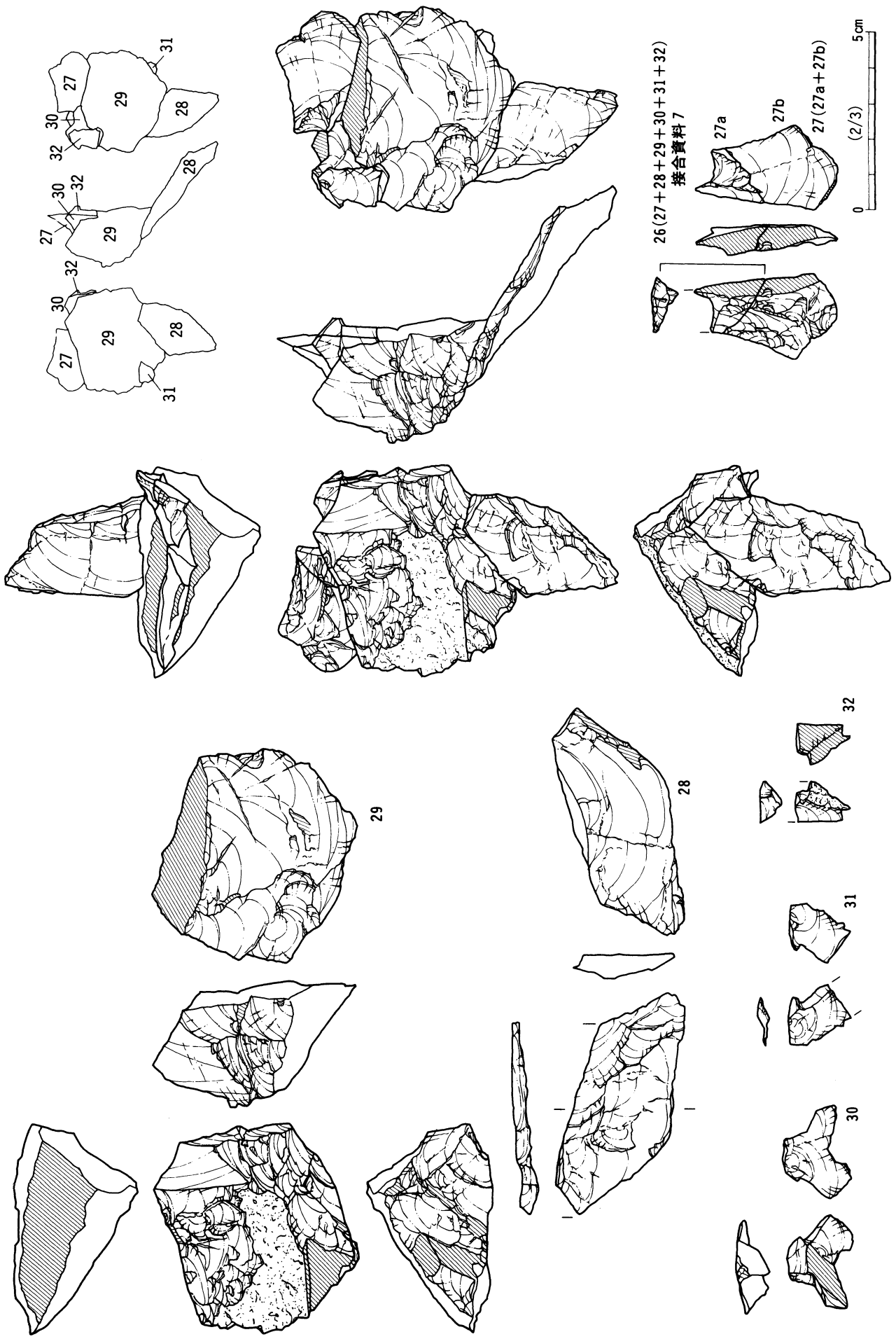
第 8 図　出土石器実測図 (1)



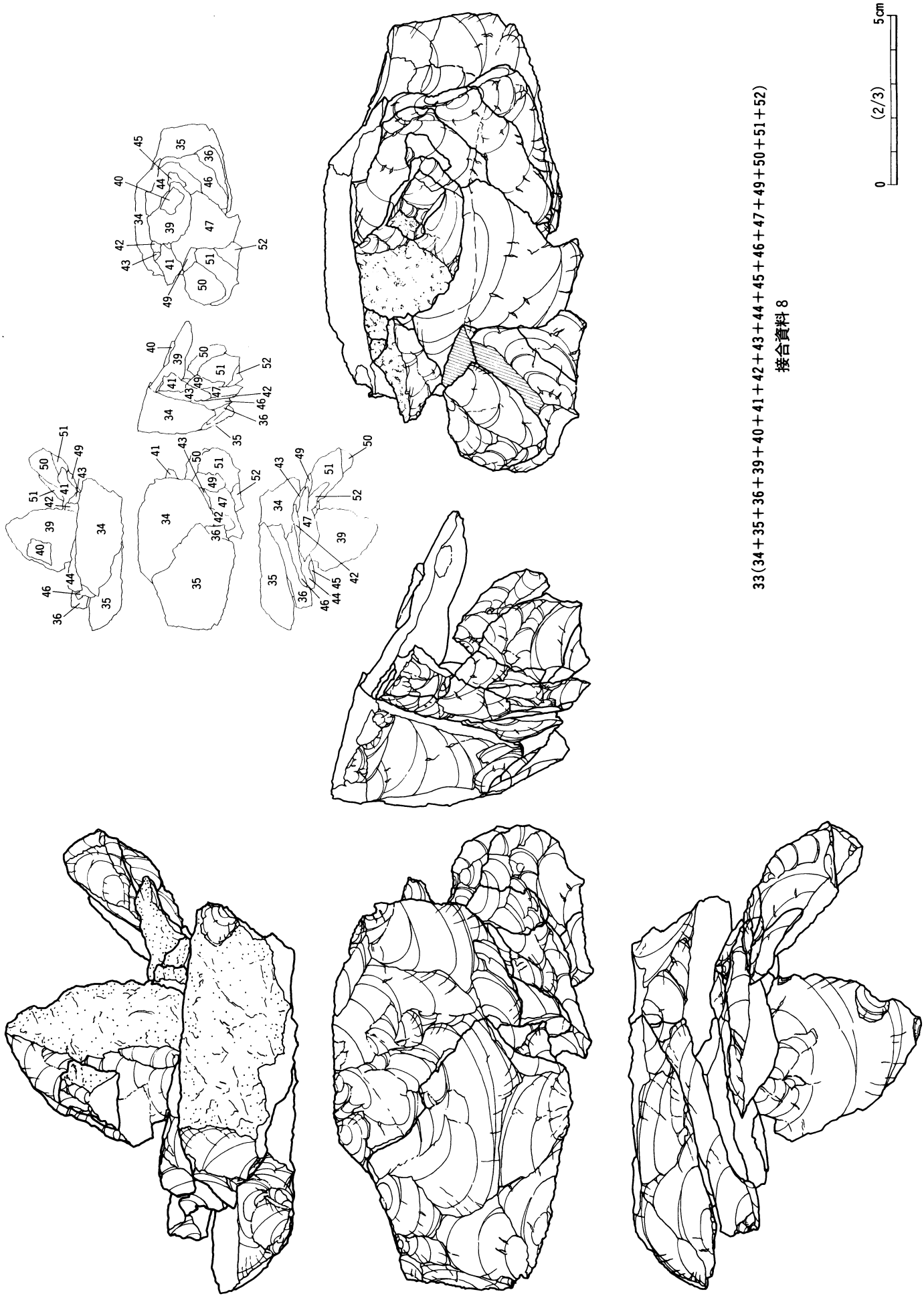
第 9 図　出土石器実測図 (2)



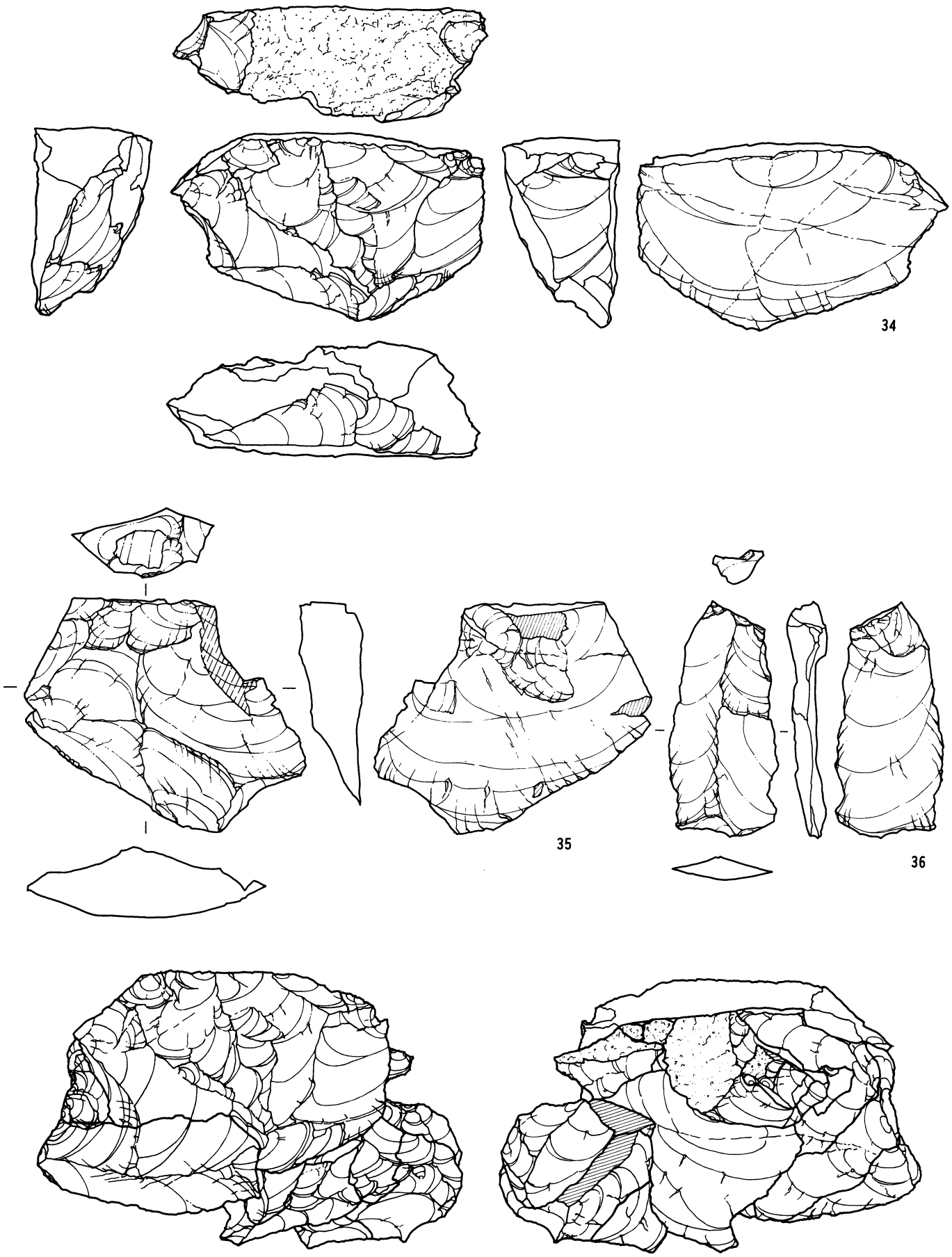
第10図　出土石器実測図（3）



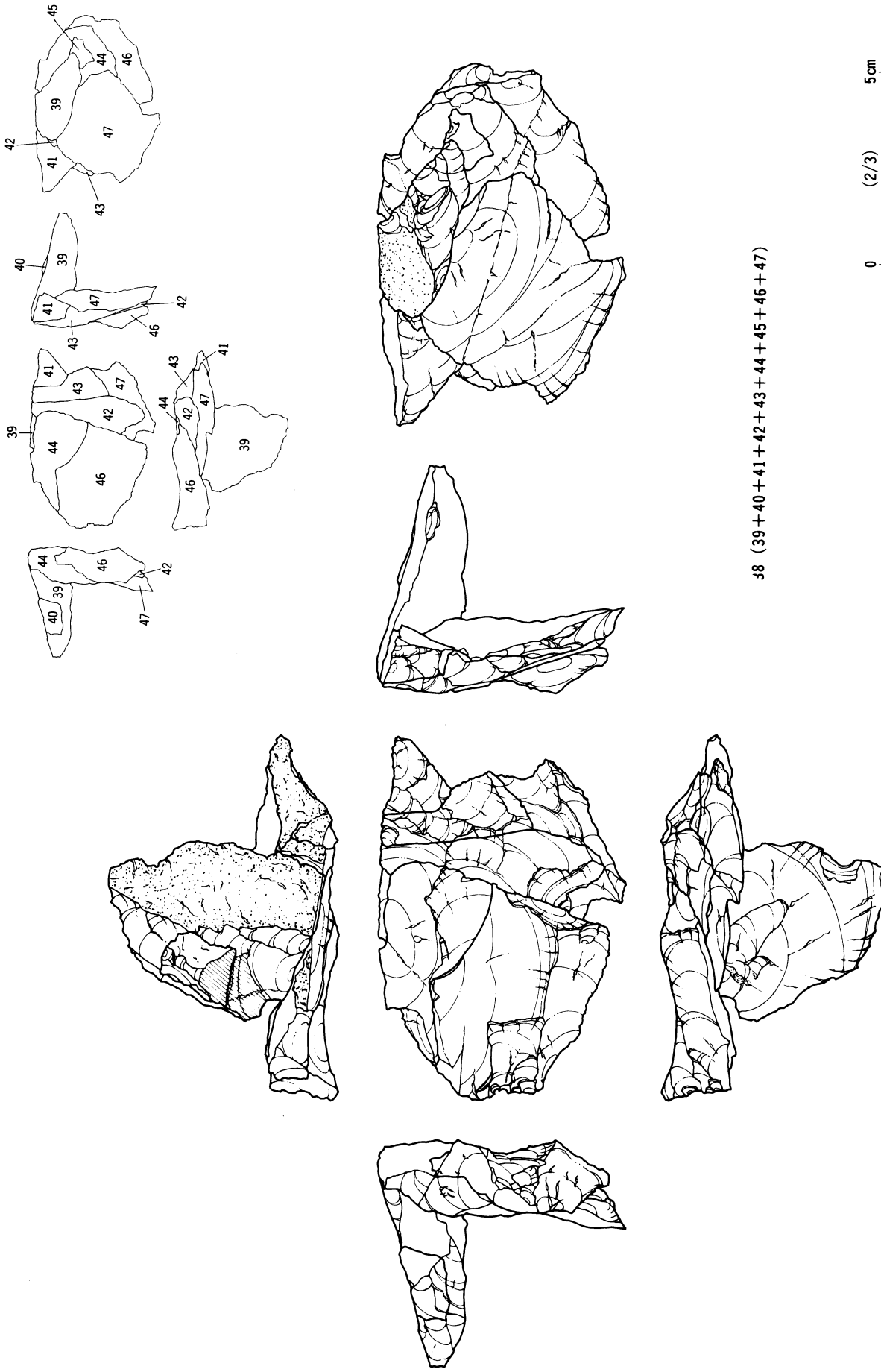
第11図　出土石器実測図（4）



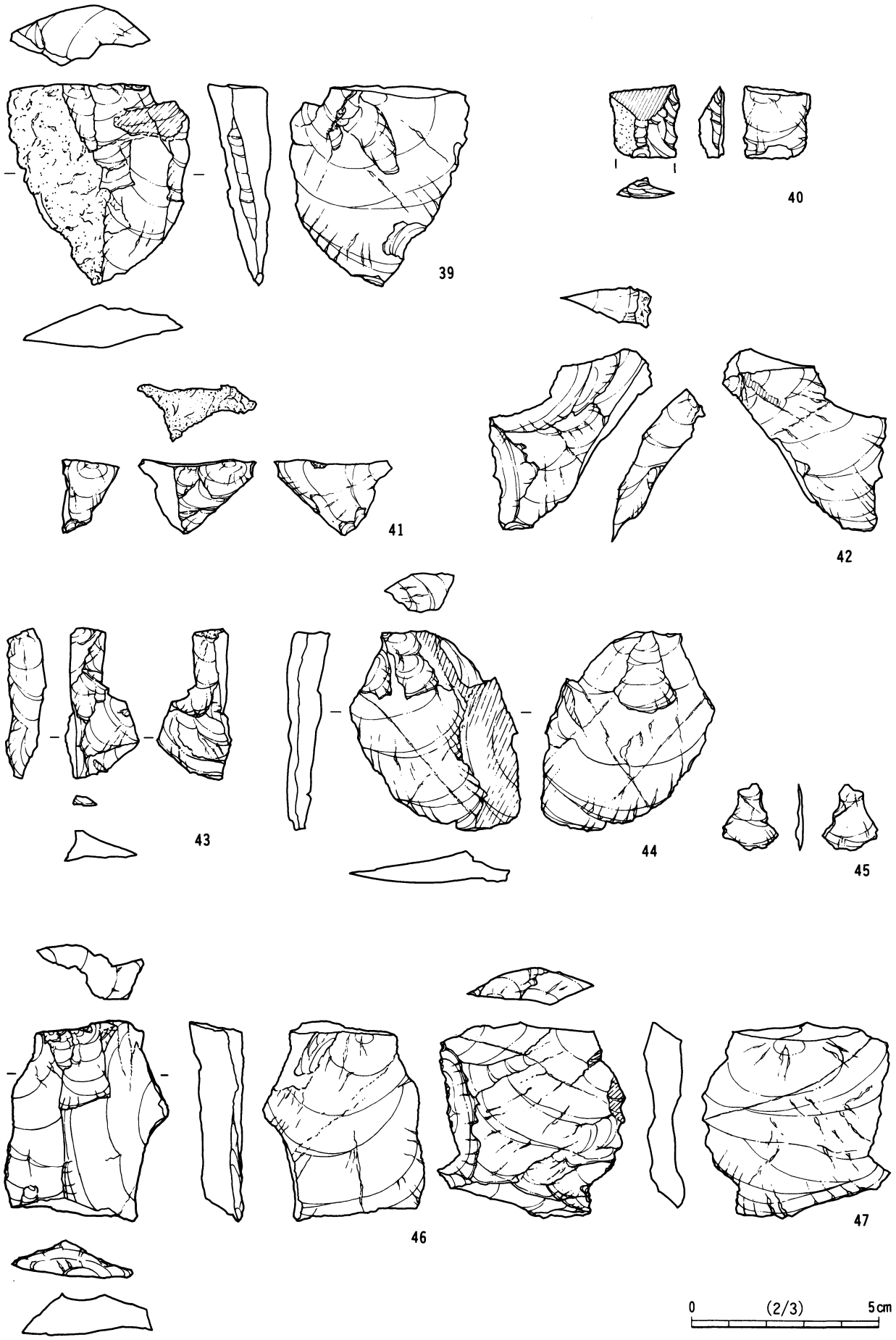
第12図　出土石器実測図 (5)



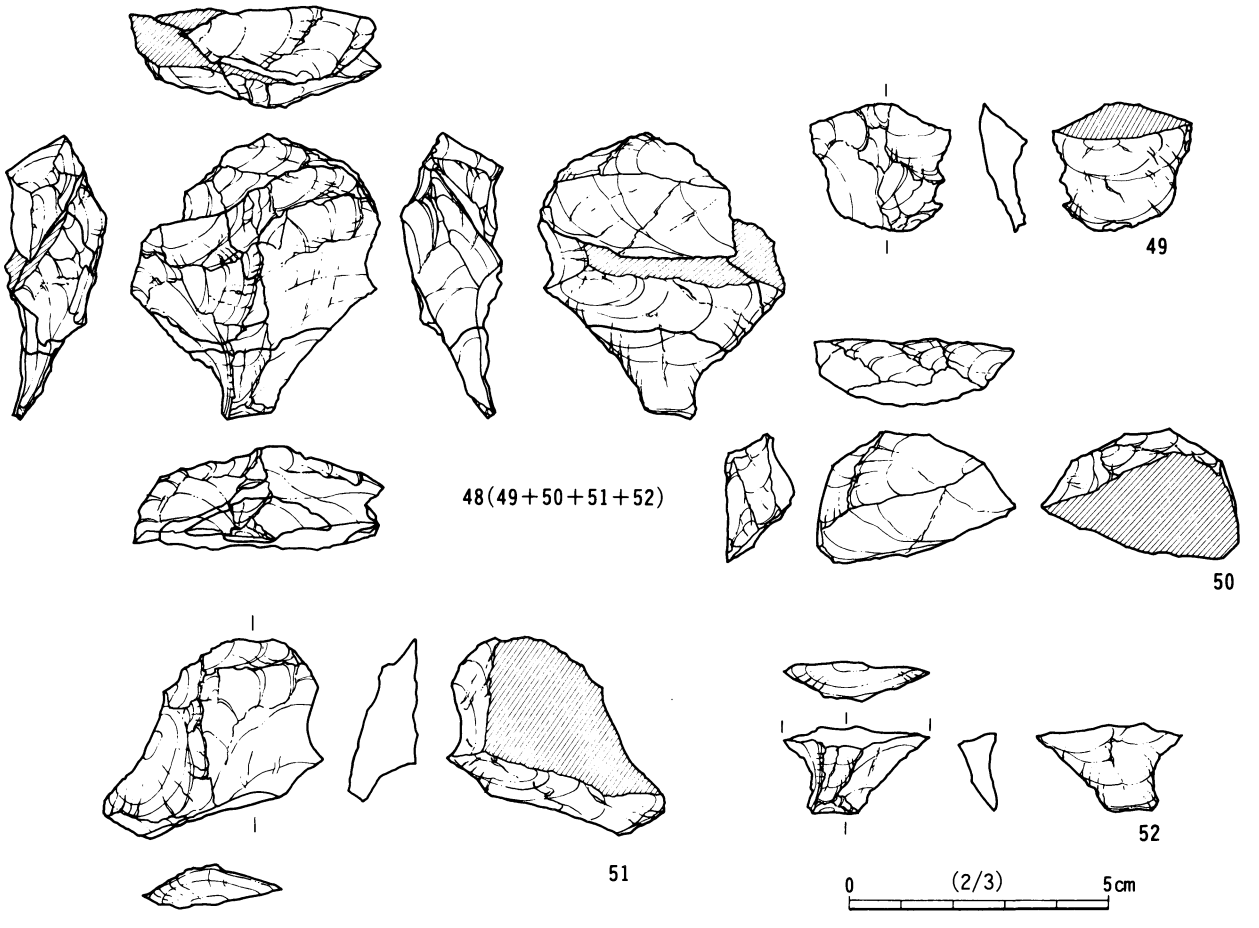
第13図　出土石器実測図（6）



第14図　出土石器実測図（7）



第15図　出土石器実測図（8）



第16図　出土石器実測図（9）

(2)　出土遺物（第８～16図、図版３・４）

１～８は非接合資料である。１、８は打面部に欠損が認められ、３は多方向からの剥離面が認められることから石核とした。３以外は剥片である。９、12、13、16、17は接合資料であり、９と13は剥離された剥片の接合例である。12、16、17は折り、ないしは折れの剥片が接合している。18は20a、20b、21、22a、22b、24、25の合計７点の剥片が接合している。接合状況から３～４回の打面再生が行われたと考えられる。剥離順序は、22が剥離されたのちに22bが折れ、23の背面を打面として３枚以上の剥片剥離が行われている。さらに、24→25と打面再生を行い、20→21の順序で剥離が進んでいる。21は左側縁に使用痕がある。20a、20bは節理のため折れたと考えられる。26には27a、27b、28～32の合計７点が接合している。31は節理面から剥離されている。数度の剥離を行ったのちに、横長剥片の28が剥離されている。28は一部にヒンジフラクチャーを呈している。また、厚手の大形剥片である29を剥離している。30、27a、27bは剥離されたのちに欠損している。30ののちに31が剥離されている。33は34～36、39～47、49～52の合計16点が接合している状態である。35を剥離した状態が、37の接合状況図である。35の末端部に使用痕が認められる。次に、36→34と２枚の剥片が剥離された状態が38である。36は縦長剥片である。同一方向から46→44が剥離されている。45は、44を剥離した際のバルバスカー剥片である。さらに、39→40→（41→42→43）と剥離が進んでいる。41～43は自然面を打面として１枚の剥片を折断している。43は両側面がネガティブ面の剥片である。47が剥離されて48の状態が残る。50の主要剥離面は節理である。49は51の節理面を打面として剥離されており、最後に51から52が折断されている。

第1表　石器属性表（1）

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成	打角(°)	末端形状	折面部位	標高(m)	備　考
1	2A13	97	剝片	38.6	48.4	8.5	11.80	−	−	−	I＋II＋III	−	F	H	18.067	
2	2A13	63	剝片	51.2	37.0	8.0	13.90	2	−	−	I＋II	101	F	−	18.087	
3	2A13	30	石核	20.5	42.4	12.0	11.38	−	−	−	−	−	−	−	18.201	
4	2A13	38	剝片	26.7	27.1	11.7	8.09	2	−	−	I＋IV	96	F	−	18.090	
5	2A13	112	剝片	36.5	27.4	13.1	8.10	2	−	−	I＋III	104	F	−	17.946	
6	2A13	36	剝片	40.2	42.0	11.8	14.24	3	−	−	I＋III＋IV	94	F	−	18.080	
7	2A13	69	剝片	51.2	45.8	8.1	19.50	0+2	−	−	I＋IV	94	S	−	18.125	
8	3A01	43	剝片	44.5	25.5	10.4	7.10	−	−	−	I＋IV	−	F	H	18.150	
10	3A01	9	剝片	31.9	14.3	6.4	2.98	3	−	−	I＋III	104	−	B	18.276	接合資料1
11	2A13	47	剝片	24.1	24.2	2.9	1.43	3	−	−	I	110	−	B	18.085	接合資料1
12a	2A13	99	剝片	64.7	50.0	10.3	24.20	3	−	−	I＋II	98	F	R	18.114	接合資料2
12b	2A13	68	剝片	60.2	27.8	11.9	16.70	3	−	−	I＋III	98	F	L	18.103	接合資料2
14	2A13	110	剝片	12.4	7.8	2.4	0.20	−	−	−	I＋IV	−	−	H・B	17.970	接合資料3
15	2A13	106	剝片	17.9	5.0	2.7	0.12	5	−	−	IV	−	F	−	17.920	接合資料3
16a	2A13	19	剝片	11.0	32.3	7.1	2.97	−	−	−	I＋II	−	−	H・B	18.226	接合資料4
16b	2A13	95	剝片	36.9	48.3	10.4	18.00	−	−	−	I＋S	−	F	H	18.138	接合資料4
17a	2A13	81	剝片	33.8	30.9	10.1	11.90	3	−	−	I	102	−	B	18.177	接合資料5
17b	2A13	27	剝片	30.8	38.1	11.4	12.49	−	−	−	I	−	−	H・B	18.257	接合資料5
20a	2A13	85	剝片	10.5	27.7	3.0	0.90	−	−	−	I＋IV	−	−	H・B	18.045	接合資料6
20b	2A13	82	剝片	22.8	26.8	3.0	2.20	−	−	−	I＋IV	−	−	H・B	18.064	接合資料6
21	2A13	92	UF	47.1	44.9	12.0	18.90	3	−	−	I＋IV	102	F	R	18.160	接合資料6
22a	2A13	35	剝片	47.0	76.2	8.7	19.91	3	−	−	I＋III	100	F	R	18.120	接合資料6
22b	2A13	34	剝片	27.3	27.6	3.9	2.45	−	−	−	I＋II＋S	−	−	H・B	18.172	接合資料6
24	3A02	2	剝片	27.8	40.7	5.9	6.41	3	−	−	I＋II	100	F	−	18.050	接合資料6
25	2A13	70	剝片	48.1	81.5	10.3	27.90	3	−	−	I＋II＋III	90	F	−	18.110	接合資料6
27a	2A13	107	剝片	19.8	15.5	7.3	1.30	−	−	−	IV	−	−	H・B	18.037	接合資料7
27b	2A13	76	剝片	31.8	23.3	6.6	3.80	−	−	−	I＋III＋IV	−	F	H	18.207	接合資料7
28	2A13	40	剝片	36.5	63.5	6.4	12.74	−	−	−	I＋II	−	H	H	18.138	接合資料7
29	2A13	59	剝片	56.1	59.9	31.7	90.16	1	−	−	I＋II＋III＋C＋S	131	F	H	18.125	接合資料7
30	2A13	8	剝片	15.4	24.5	8.5	1.66	2	−	−	I＋II＋III＋S	115	F	−	18.283	接合資料7
31	3A01	56	剝片	17.2	16.8	3.3	0.73	2	−	−	I＋III	106	−	B	18.060	接合資料7
32	2A13	114	剝片	14.7	10.7	6.5	0.80	−	−	−	I＋C	−	F	H	17.903	接合資料7
34	3A01	89	剝片	52.2	87.9	31.8	154.5	0	−	−	I＋III＋IV	102	F	−	18.047	接合資料8
35	2A13	71	UF	65.0	79.2	20.9	79.30	3	−	−	I＋III＋IV	106	F	−	18.098	接合資料8
36	2A13	37	剝片	64.0	31.7	10.8	14.91	2	−	−	I＋II	98	F	−	18.092	接合資料8
39	2A13	21	剝片	57.4	48.4	14.0	34.00	3	−	−	I＋C	100	F	−	18.178	接合資料8
40	2A13	51	剝片	21.0	18.8	6.5	2.39	−	−	−	I＋III＋C	−	−	B	18.022	接合資料8
41	2A13	64	剝片	20.1	31.8	13.7	4.80	0	−	−	I	−	F	−	18.105	接合資料8
42	2A13	96	剝片	47.8	43.8	13.0	12.60	−	−	−	I＋II＋III	109	F	R	18.114	接合資料8
43	2A13	18	剝片	41.2	18.8	10.6	5.52	0	−	−	I＋II＋IV	−	−	B・L	18.280	接合資料8
44	3A01	54	剝片	54.2	46.5	10.3	19.44	2	−	−	I＋II	96	H	−	18.020	接合資料8
45	2A13	86	剝片	17.7	14.8	1.8	0.30	−	−	−	I	−	F	H	18.166	接合資料8
46	2A13	108	剝片	52.8	42.3	14.3	27.20	2	−	○	I＋II	104	−	B・R	18.090	接合資料8
47	2A13	20	剝片	52.5	52.3	10.4	26.10	3	−	−	I＋II＋III＋IV	120	S	−	18.127	接合資料8
49	2A13	103	剝片	26.0	27.5	10.3	4.70	1	−	−	I＋III＋IV	125	F	−	18.085	接合資料8
50	2A13	48	剝片	25.0	38.5	12.0	11.59	2	−	−	I＋II	−	−	−	18.112	接合資料8
51	2A13	62	剝片	33.9	46.1	15.8	19.88	−	−	−	III＋IV	−	−	B	18.085	接合資料8
52	2A13	42	剝片	16.3	27.7	8.2	2.13	−	−	−	I＋II＋IV	−	H	H	18.094	接合資料8
	2A13	1	剝片	11.2	6.8	1.3	0.10	2	−	−	I	107	−	B	18.313	
	3A01	3	剝片	14.6	25.7	2.3	0.76	−	−	−	I＋II	−	−	H・B	18.260	
	3A01	4	剝片	12.8	14.6	2.1	0.25	2	−	−	I	98	−	B	18.235	
	3A01	5	剝片	13.9	21.3	2.5	0.58	−	−	−	I＋III	−	F	H	18.290	
	2A13	6	剝片	12.2	13.7	3.4	0.38	−	−	−	I	−	−	H・B	18.276	
	2A13	7	剝片	5.7	12.5	1.5	0.11	−	−	−	I	−	−	H・B・L	18.284	
	3A01	10	剝片	5.8	14.4	1.2	0.16	−	−	−	III	−	−	H・B・L	18.280	
	3A01	11	剝片	4.8	14.6	2.0	0.21	−	−	−	III	−	−	H・B	18.200	

第2表　石器属性表（2）

挿図番号	グリッド	遺物番号	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	打面形状	打面調整	頭部調整	背面構成	打角(°)	末端形状	折面部位	標高(m)	備考
	3A01	12	剝片	13.0	10.7	2.6	0.30	−	−	−	I	−	−	H・B	18.177	
	3A01	13	剝片	12.2	7.6	3.3	0.35	−	−	−	IV＋C	−	−	H・B・R	18.206	
	3A01	14	剝片	12.1	19.2	6.2	0.68	−	−	−	II＋IV	−	−	H・B	18.187	
	2A13	15	剝片	10.1	13.8	3.5	0.34	−	−	−	I	−	−	H・B	18.220	
	2A13	16	剝片	17.6	28.2	2.3	1.17	−	−	−	II	−	−	H・B・R	18.225	
	2A13	17	剝片	12.7	15.9	4.5	0.79	−	−	−	III	−	−	H・B・R	18.243	
	2A13	22	剝片	14.3	13.5	2.1	0.47	3	−	−	IV	102	−	B・R・L	18.228	
	2A13	23	剝片	10.2	10.4	2.0	0.24	0	−	−	I	95	−	H・B	18.192	
	2A13	24	剝片	16.1	12.3	2.7	0.51	3	−	−	I	105	−	B・R	18.271	
	2A13	25	剝片	16.0	7.1	2.7	0.25	−	−	−	III	−	−	H・B	18.260	
	2A13	26	剝片	7.0	10.2	2.7	0.15	3	−	−	III	97	−	B	18.184	
	2A13	28	剝片	14.5	12.8	2.0	0.38	2	−	−	II	−	−	B	18.215	
	2A13	29	剝片	30.6	18.1	3.3	1.25	−	−	−	II	−	F	H	18.206	
	2A13	31	剝片	14.8	17.3	3.1	0.43	3	−	−	I	93	H	−	18.168	
	2A13	32	剝片	23.4	16.0	7.0	1.96	−	−	−	I	−	F	H	18.200	
	2A13	33	剝片	5.7	20.1	5.6	0.42	−	−	−	I	−	−	H・B	18.208	
	2A13	39	剝片	17.1	28.9	8.2	2.10	−	−	−	I＋II	−	F	H	18.085	
	2A13	41	砕片	7.7	10.3	0.6	0.06	−	−	−	IV	−	−	H・B	18.083	
	3A01	44	剝片	6.8	12.4	3.0	0.20	2	−	−	III	129	F	−	18.142	
	2A13	45	剝片	22.0	16.1	4.3	1.53	2	−	−	I＋C	114	F	−	18.157	
	2A13	46	剝片	18.4	18.0	3.4	0.90	−	−	−	I	−	−	H・B・R	18.125	
	2A13	49	剝片	16.6	23.6	3.1	1.06	0	−	−	I	118	−	B	18.142	
	2A13	52	剝片	14.0	15.2	7.8	1.49	0	−	−	S	99	H	−	17.982	
	3A01	53	剝片	10.6	8.1	1.5	0.12	−	−	−	III	−	−	H・B	18.013	
	3A01	55	剝片	13.8	11.3	2.9	0.41	−	−	−	III	−	−	H・B・L	18.010	
	2A14	57	剝片	11.0	20.4	3.1	0.59	−	−	−	I＋IV	−	−	H・B	18.046	
	2A14	58	剝片	14.6	11.0	2.6	0.36	2	−	−	I＋III	113	F	−	18.061	
	2A13	60	剝片	14.3	20.5	5.5	1.14	−	−	−	I	−	−	B	18.256	
	2A13	61	剝片	10.4	20.3	5.2	0.79	−	−	−	−	−	F	H	18.163	
	3A01	65	剝片	15.4	11.0	3.7	0.80	2	−	−	I＋II	110	−	B・R	18.055	
	3A01	66	剝片	20.5	20.1	6.9	2.00	−	−	−	I＋III	−	S	H	18.135	
	2A13	67	砕片	5.6	8.8	1.5	0.05	−	−	−	I	−	−	H・B・R	18.023	
	2A13	72	剝片	11.2	13.0	3.6	0.40	2	−	−	I＋II	145	S	−	18.200	
	2A13	73	剝片	20.6	22.5	4.9	1.40	−	−	−	I＋IV	−	−	H・B	18.202	
	2A13	74	剝片	11.3	3.8	2.8	0.10	0	−	−	I＋III	80	−	B	18.100	
	2A13	75	剝片	13.9	10.7	1.3	0.10	−	−	−	I	−	−	H・B	18.195	
	2A13	77	剝片	15.5	12.8	1.8	0.30	1	−	−	II	152	H	−	18.115	
	2A13	78	剝片	18.4	10.2	1.5	0.30	−	−	−	I	−	−	H・B	18.095	
	2A13	79	剝片	15.8	8.5	2.3	0.20	−	−	−	I	−	−	H・B	18.125	
	3A01	80	剝片	11.0	20.8	4.5	1.10	−	−	−	I＋II	−	−	H・B・L	18.166	
	2A13	83	砕片	3.4	3.7	0.9	0.01	−	−	−	−	−	−	H・B・R	18.238	
	2A13	84	剝片	25.2	12.7	3.7	1.10	−	−	−	II＋IV	−	−	H・B・R	18.116	
	3A01	88	剝片	10.2	11.6	0.7	0.10	−	−	−	IV	−	−	H・B	17.937	
	3A01	90	剝片	6.7	12.3	1.9	0.20	−	−	−	II＋IV	−	S	H	18.042	
	3A01	91	剝片	20.8	18.2	6.9	2.10	2	−	−	I＋III	104	F	−	17.955	
	2A13	93	砕片	6.7	5.1	2.4	0.06	−	−	−	I	−	−	H・B	18.163	
	2A13	94	剝片	10.2	11.0	8.2	0.60	−	−	−	III	−	−	H・B	18.148	
	2A13	98	剝片	10.6	6.2	1.2	0.10	−	−	−	I	−	−	H・B・R	18.085	
	2A13	100	剝片	24.6	17.8	5.9	1.20	−	−	−	I	−	F	H	18.092	
	2A13	101	剝片	18.9	14.8	1.4	0.50	−	−	−	I＋IV	−	−	H・B	18.102	
	2A13	102	剝片	8.6	20.9	6.6	1.20	0	−	−	I	99	F	−	17.977	
	2A13	104	砕片	8.8	5.0	1.9	0.10	−	−	−	III	−	F	H・R・L	18.023	
	2A13	105	剝片	22.5	23.6	4.2	2.30	2	−	−	I＋IV＋S	108	−	B	17.828	
	2A13	109	剝片	10.6	8.9	1.5	0.17	−	−	−	III	−	F	H	17.915	
	2A13	111	剝片	20.9	25.8	3.4	1.20	2	−	−	II	97	−	B	18.025	
	2A13	113	剝片	27.7	13.2	5.1	2.00	−	−	−	I＋II	−	−	H・B	17.907	

2　弥生時代以降

(1)　概要

弥生時代中期後半の溝１条（001号跡）とこれを切って開削されている溝１条（002号跡）を検出した。共に、隣接する調査区で確認されている溝と接続する。両溝とも出土した遺物は少量である。

(2)　遺構と出土遺物（第17図、図版２）

００１号跡

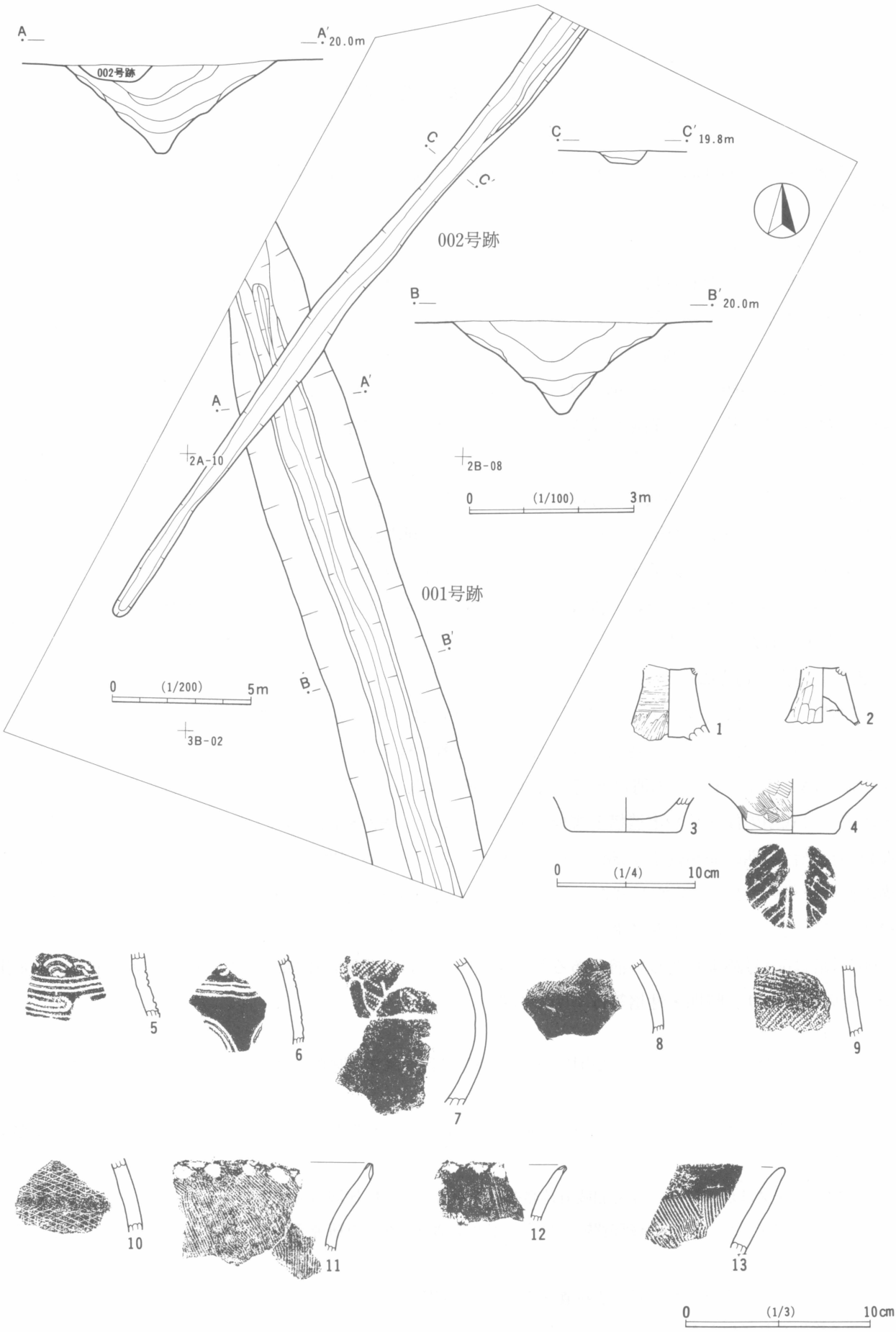
調査区を南から北にほぼ直線状に縦断する溝で、長さ約25mを調査した。上面幅2.8m～4.0m、深さ0.8m～1.8mを測り、北端部で幅・深さとも減じている。側壁は、東西両壁とも溝底から20cm～30cmの高さまでは約50°の角度で立ち上がり、幅20cm～30cmの平坦なテラス状を形成して、そこから溝上端まで40°前後の角度で立ち上がっている。しっかりと掘り込まれている堅固な溝である。溝底幅は5cm～30cmを測り、断面の形状はＶ字状を呈している。溝底はほぼ平坦である。覆土は６層に大別され、自然堆積した状態を示している。

出土した遺物は、縄文時代の土器片が数点のほか、弥生時代中期後半から古墳時代前期の壺・甕の底部片７点と総遺物量の大半を占める小破片である。５・６は壺形土器の頸部から肩部にかけての同一個体である。５は、器面に連続した３本単位の櫛描を施し、半截竹管の刺突によって連結した凝流水文が認められる。その上部には櫛描の扇形文が付されている。６は、３本単位の平行櫛描文とその下部に櫛描波状文が施されている。７は壺形土器の胴部の破片で、ヘラ描き沈線で舌状文を施し、縄文を充塡している。ヘラミガキによる無文部は赤彩されている。９は、ハケメ整形による無文部を挟み上下二段に斜行縄文が施されている。11・12は甕形土器の口縁部でいずれも緩やかに外反し、指頭押捺による小波状口縁を呈している。11の外面は斜め方向のハケメが認められ、内面は横方向のハケメが認められる。12の外面は縦方向に粗いハケメが認められ、内面は横方向に丁寧に施されている。３は壺形土器の底部で、ヘラによって整形されている。４は壺形土器の底部で、木葉痕が認められる。

００２号跡

調査区を南西から北東に縦断する溝で、長さ約27.5mを調査した。上面幅は、最も狭い部分で0.5m、最も広い部分で1.4mを測り、隣接する調査区付近で広がりを見せている。深さは0.07m～0.34mを測り、区域外に近づくに従って深く掘り込まれている。溝底幅は0.15m～0.55mを測り、断面の形状はＵ字形を呈する。溝底はほぼ平坦である。覆土は２層に大別され、自然堆積の状態を示している。

出土した遺物は、奈良・平安時代の杯の底部１点のほか、古墳時代の器台や高杯の脚部８点、壺・甕の底部７点、土師器片20数点などである。１は高杯の脚部で、器面は横方向にハケによる調整を行ったのちにヘラミガキを施している。裾部には径１cmほどの透孔が３か所認められ、外面は赤彩されている。２は高杯の脚部で、縦方向のヘラナデ調整をして仕上げている。内面は粗くヘラケズリされている。外面は赤彩されている。８は壺形土器の肩部の破片で、羽状縄文帯と無文部を結節文によって区画している。外面は赤彩されている。10は壺形土器の肩部の破片で、網目状撚糸文が施されている。13は縦方向のハケメ、口縁部にヨコナデが認められる。



第 17 図　001・002 号跡及び出土遺物（1・2・8・10・13以外は001号跡出土）

Ⅲ　ま と め

本遺跡では、旧石器時代の石器集中地点１か所と、弥生時代中期後半の溝１条及びそれ以降の溝１条を検出した。

(1)　旧石器時代

本遺跡で検出された石器群は、すべて同一母岩と考えられるが、礫面を残す剝片が少ないことから、原石をある程度加工してから搬入されたものと考えられる。なお、接合資料６～８の状況を考慮すると、大形の原石を少なくても３個に分割して持ち込んだと考えられる。次に、剝片剝離方法は、資料６と資料７、８の二つの技法が観察できる。前者は、石核調整を行い、礫面のない状態をつくり、打面再生をしながら剝片剝離を行う。後者は、剝離作業面と打面を入れ替え、剝片剝離を行う。どちらも打面調整は行っていない。

近隣におけるⅨ層段階の代表的な遺跡として、北東に約８km離れた萱田地区遺跡群の坊山遺跡[1]、北海道遺跡[2]があるが、本遺跡の出土資料とこれらの遺跡では剝片剝離技術のあり方に違いが見られる。

本遺跡が所在する東京湾北東岸においては、旧石器時代の資料の報告例がほとんどないことから、検出された石器集中地点は１か所に過ぎないが、Ⅸ層段階の原石利用方法と剝片剝離技術の様相に関する貴重な資料が得られたと言える。

(2)　弥生時代以降

001号跡については、隣接地の調査においても弥生時代の住居跡が検出されておらず、また、出土遺物に乏しいが、覆土中からは弥生時代中期の宮ノ台式土器が検出されていることや溝の掘削形状などから、弥生中期の溝と考えられる。本遺跡と同一台地上北西約0.5kmに位置する馬加城遺跡では、小規模な調査であるが宮ノ台式期の住居跡や本遺構と規模や形状が類似した溝が検出されている[3]。溝から出土した遺物は少ないが宮ノ台式期の壷が覆土下部から検出されていることから同期の溝として捉えることが可能である。溝の性格については、部分的な調査でもあり、八千代市田原窪遺跡[4]のような住居群を取り巻く環濠として機能していたかどうかは不明である[5]。

002号跡は001号跡より新しい溝であるが、覆土中からは弥生時代中期から古墳時代前期の土器が少量出土したのみであり、時期・性格等は不明である。

注１　田村　隆ほか　1993　『八千代市坊山遺跡―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ―』　財団法人千葉県文化財センター

２　橋本　勝雄ほか　1985　『八千代市北海道遺跡―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―』　財団法人千葉県文化財センター

３　村山　好文ほか　1980　『馬加城遺跡発掘調査報告書』　馬加城遺跡調査会

４　秋山　利光　1995　「田原窪遺跡」『平成６年度千葉県遺跡調査研究発表会　発表要旨』　千葉県文化財法人連絡協議会

５　当センターで調査した市原市草刈遺跡でも、弥生時代の住居群とともに中期及び後期と考えられるＶ字溝が数条検出されているが、直線的なものや弧状を呈するものなどであり、住居群を円形に取り巻くものは検出されていない。

遺跡周辺航空写真

図版2

旧石器時代石器出土状況

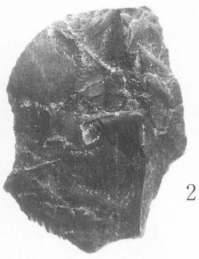
001号跡全景

001号跡土層断面

旧石器時代
出土石器

図版 3

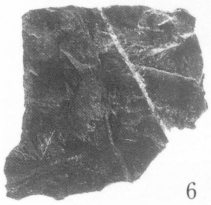
1

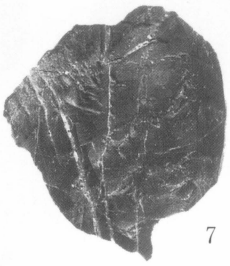

2

3

4

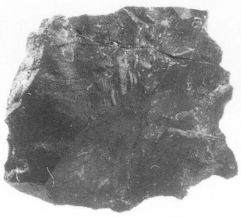
5


6

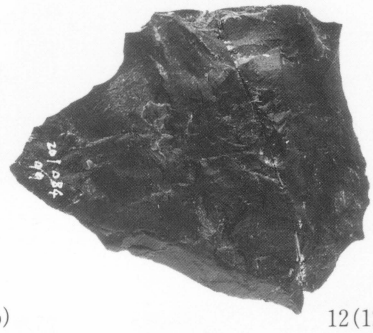

7

8

9 (10＋11)


16 (16a＋16b)

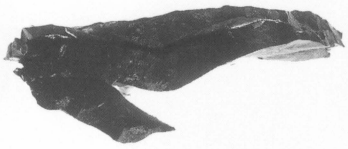
17 (17a＋17b)

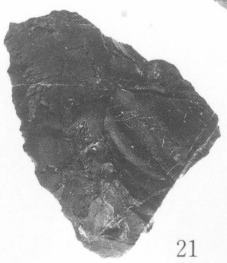

12 (12a＋12b)

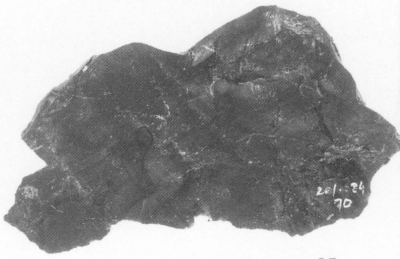
接合資料 6

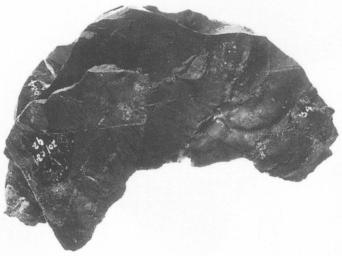
20 (20a＋20b)

22 (22a＋22b)



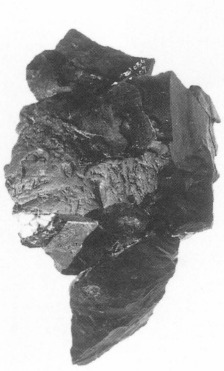

21


25


18

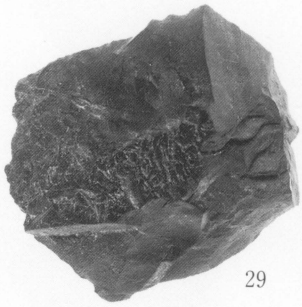
24

接合資料 7



26

28

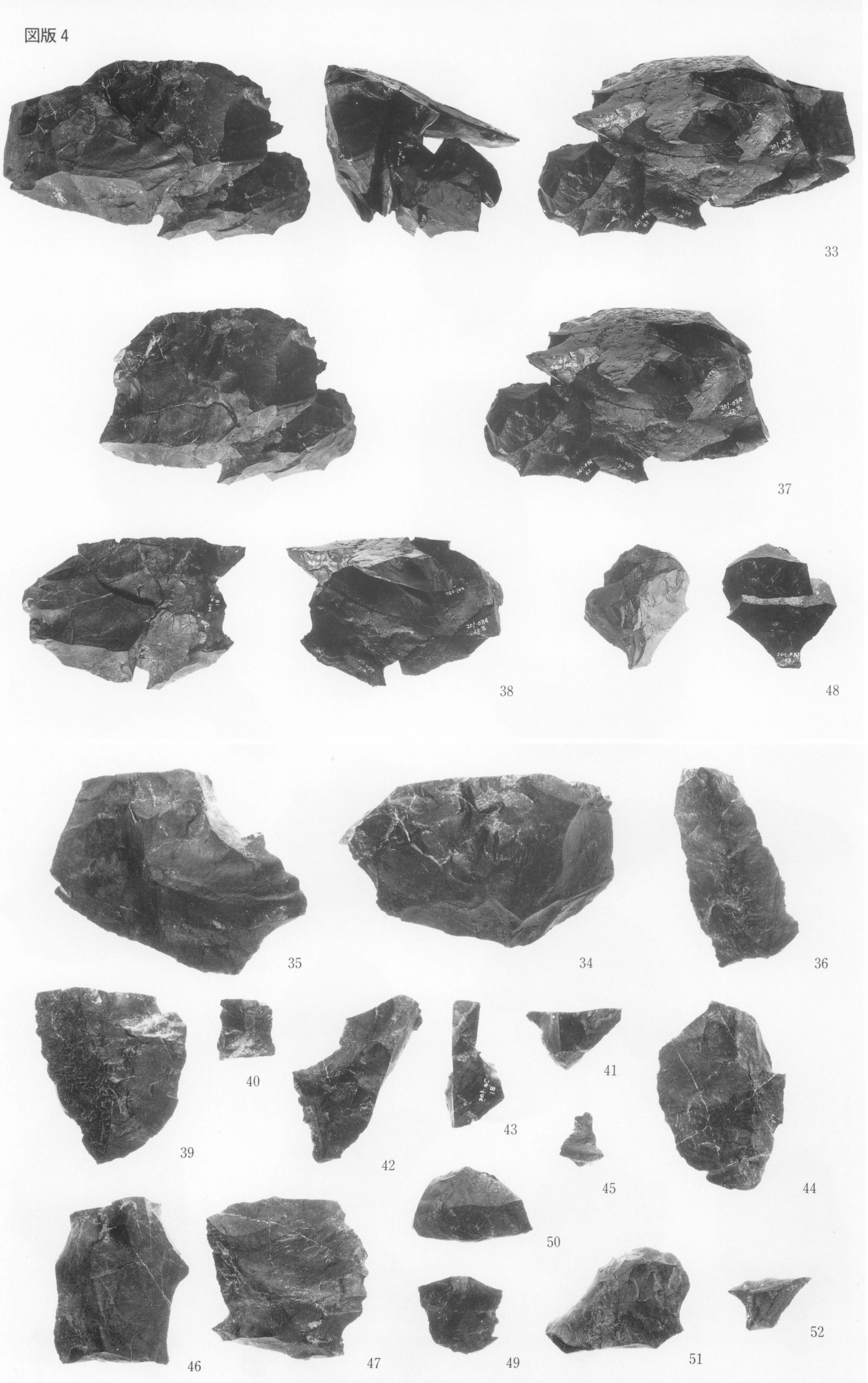

29

27 (27a＋27b)

30

31

32


33
37
38
48
35
34
36
39
40
42
43
41
45
44
50
46
47
49
51
52

報告書抄録

ふりがな	ちばしたけいしいせき
書名	千葉市武石遺跡
副書名	千葉西税務署埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第308集
編著者名	岩谷久美子
編集機関	財団法人　千葉県文化財センター
所在地	〒284　千葉県四街道市鹿渡809番地－2　TEL　043-422-8811
発行年月日	西暦１９９７年3月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
武石（たけいし）	千葉県千葉市花見川区武石町１丁目520番地2号（ちばけんちばしはなみがわくたけいしちょういっちょうめ）	12201	084	35度 39分 46秒	140度 3分 58秒	19881001～ 19881108	600.75	千葉西税務署増設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武石	集落	旧石器時代 弥生時代以降	石器集中地点１地点 溝　２条	石器（剥片） 縄文土器 弥生土器 土師器	

千葉県文化財センター調査報告第308集

千 葉 市 武 石 遺 跡

千葉西税務署埋蔵文化財調査報告書

平成９年３月31日発行

編　　集　　財団法人　千葉県文化財センター

発　　行　　東　京　国　税　局
千葉市中央区椿森５－６－１

財団法人　千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809－２

印　　刷　　株式会社　弘　文　社
市川市市川南２－７－２